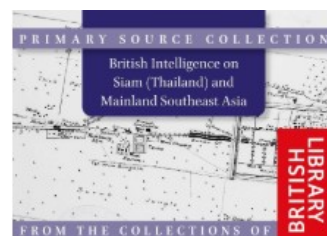


■ 英領インドを通して見る 20 世紀前半の東南アジア大陸部

シャム(タイ)および東南アジア本土に関する 英国の諜報 1887~1948 年頃 British Intelligence on Siam (Thailand) and Mainland Southeast Asia, c. 1887-1948

英仏の勢力争い、日本の台頭、冷戦の起源

英領インドは、タイとの関係において重要な「前線」の役割を果たし、特に仏領インドシナからの「脅威」に対抗する動きを見せました。本コレクションに収録された資料は、英仏両国の政策や、現地の政治情勢を「望ましい」方向へと誘導しようとする試みを記録したものです。特に、ナショナリズムや共産主義の台頭への対策に重点が置かれるようになりました。本資料には、日本の影響力の拡大、第二次世界大戦、その直後の状況についても詳細に記録されています。



このコレクションに含まれる資料は、1887 年から 1948 年にかけてロンドンのインド省に蓄積された機密文書や印刷物であり、特にタイを中心とする東南アジア本土に関する英領インド政府の独自の視点を提供します。理論上、英領インドがこの地域に直接関与することは少なかったはずですが。タイは独立国であり、外交関係は英国外務省が担っていました。また、マレー半島の一部は英国植民地であり、残りは英国の保護国として植民地省の管轄下にありました。さらに、カンボジア、ラオス、ベトナムは仏領でした。しかし、実際には英領インドはこの地域で重要な役割を果たしていました。その理由として、以下の点が挙げられます。

- 英国の戦略計画において、インド軍は常に主要な戦力であった。
- 英領ビルマの国境が段階的な併合（1824~26 年、1852~54 年、1885~86 年）を経て形成され、1937 年まで英領インドの州として統治されたため、タイとは数百マイルにわたる国境を接することとなり、さらにメコン川北部でフランスの勢力とも接触することになった。
- タイには、ビルマ人やインド人を中心とする英国植民地の臣民が多数居住し、働いていた。

本コレクションは、こうした歴史的背景のもとで、英領インドがタイおよび東南アジア本土にどのように関わっていたのかを明らかにする貴重な資料群です。

大学・学術機関向け

買い切り (Outright Purchase)・同時アクセス無制限

※大学・学術機関向け IP 接続・同時アクセス無制限でのご利用となります。

※Archive 買い切りの年間管理費 (Annual Hosting Fee) は不要です。

※正式な見積価格は最寄りの弊社まで別途ご用命ください。

トライアルも承ります!! 詳細お問い合わせは弊社まで

日本総代理店 **極東書店**

FAR EASTERN BOOKSELLERS
KYOKUTO SHOTEN LTD

〒101-8672 東京都千代田区神田三崎町 2-7-10 帝都三崎町ビル
〒600-8357 京都市下京区柿本町 579 五条堀川ビル
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小榎ビル

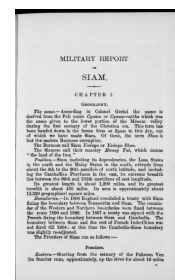
03(3265)7531 FAX (3556)3761
075(353)2093 FAX (353)2096
092(751)6956 FAX (741)0821

URL: <https://www.kyokuto-bk.co.jp>E-mail: info@kyokuto-bk.co.jp

■文書のタイプ別に全 6 セクションに整理されたアーカイブ

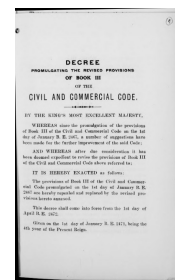
1. Southeast Asia: military reports 1892-1932

軍事報告およびルートブックは、インド軍司令部の情報部門が作成し、マラヤおよびインドネシアに関する一部の報告書はロンドンの陸軍省によって作成されました。これらの文書は、インド軍が東南アジアで欧州の敵国と交戦する可能性を前提としており、特に 1902 年および 1907 年のシヤムに関する報告書は、明確に反フランス的な内容となっています。



2. Siam (Thailand): political affairs 1887-1948

本セクションは、英国外務省の機密印刷物 21 巻を含むシヤムに関する文書から始まります。内容としては、英仏間の対立、「緩衝国」としてのタイの認識に関する合意の形成、タイの近代化の進展、憲法の発展と王室の動向、1930 年代の文民・軍部政治派閥の台頭などが含まれます。



3. Siam (Thailand): boundaries 1894-1945

このセクションには、ビルマ＝シヤム間の国境の変遷に関する小規模のファイルが含まれ、特にシャン州およびマレー半島の国境問題に焦点を当てています。関連資料については、Brill 社のコレクション『Delineating British Burma』も参照するとより理解が深まるでしょう。

4. Siam (Thailand): railways 1907-1947

英領インドは、タイ国内およびその周辺における鉄道延長計画に継続的な関心を持っていました。特に、ビルマ＝シヤム間の鉄道建設計画が初期に提案されていました。本セクションでは、日本軍によって建設された悪名高い「泰緬鉄道」の経緯についても詳述されています。また、Siam State Railways の年次報告書（1919/20～1920/21 年および 1927/28～1934/35 年）**も収録されています。



5. Siam (Thailand): consular tours 1912-1941

英国の領事官は、バンコクの主要な外交拠点に加え、チェンマイ（ランパーンに分館）およびソクラー（ブーケットに分館）に駐在していました。特に、チェンマイ領事館はインド政府の資金で運営されており、チェンマイおよびソクラーの領事巡察報告書は、定期的にインド政府へ送られていました。

英領インドの関心は、国境問題と、タイ国内の英領インド出身者に対する領事管轄権（治外法権）にありました（タイにおける治外法権は 1920 年代後半まで存続）。しかし、これらの巡察報告書には、現地の政治情勢や有力者に関する貴重な記録も含まれています。



6. Siam (Thailand): Second World War 1930-1948

本セクションでは、1930 年代の日本の影響力の拡大、ピブーン軍事政権の台頭、日本の庇護下でのタイの一時的な領土拡張、および戦後の国際的な和解について記録されています。特に、英国側の「自由タイ軍 (Free Thai Army)」に関する資料は重要です。この部隊は最終的にインドを拠点とし、日本の影響を受けたタイ政府に対抗する勢力として活動しました。



なお、上記 6 つのセクション内で、各項目について以下の情報が提供されています。

主題の説明（または書誌情報）；対象期間；インド省記録の参照番号；
インド省/ビルマ局の原本登録参照；フォリオ/ページ数。